

# 震災・世界観・想像力

## — 3・11東日本大震災被災者に聞く

山口俊雄

### 1 はじめに

3・11の大震災が起こって以来、幾度となく憤りと悲しみに襲われ、何かせずにはいられないという思いを抱え続けてきた。一人の人間としてやるべきことはいろいろあり、微力ながらいくつかのことはやってきたつもりだが、では一人の文学研究者として何ができるのかと考えた時にまず考えついたのは、震災や核エネルギー（特に原発）にまつわる文学作品を読み直すということであった。3月後半に一度、大学の新年度のゼミで（シラバスに記したのとは違う）核に関わる作品を読もうと決めたこともあった。が、その後、福島第1原子力発電所の引き起こした事態の深刻さがいよいよ具体的に明らかになるにつれて、またそれに対する政府・マスコミや人々の反応に接するにつれて、ゼミで取り上げて論じるにはあまりに現実の展開の見通しが立たなさ過ぎで、想像力と現実との相互作用の中で生み出された文学作品を読むタイミングではなかろうと思い返してやめることにした。

では自分には他に何ができるだろうかと考えていて思い付いたのは、今回の大震災の被災者となった人に、世界観・想像力がどのような影響を被ったか尋ねておこうということであった。文学は想像力という人間の営みと不可分だが、今回の大震災はその影響の深甚さによって想像力に大きな変化を与えずにはいないはずだからである。

尋ね方はいろいろあるだろう。ある程度まとまった人数を相手に、統計的な有意性を伴うような形の調査もあるだろう。しかし、私が見たいと思ったのは、一定の信頼関係を持った少人数の相手から、こちらの質問事項に丁寧に答えてもらうという形であった。そのような形であれば、統計的なデータとは全く違った意味合いで価値を持ち、私が余計な加工をするまでもなく意義のある資料となるだろう。そのような形を想定しながら、宮城県に住む友人や親戚や

妻の教え子、計4名にお願いしたところ、いずれも快く回答を引き受けてくれた。

章を改めてその回答結果を報告するが、その前に今一度調査の趣旨・手順を明確にしておくために、依頼文も掲げておくことにする（ただし、冒頭と末尾の挨拶文などは省略）。

私たち東京在住の者は、受けた被害は小さいものでしたが、それでも、震災後、（原発事故も含め）今後日本は変わらざるを得ないだろうと感じました。一生活者として世界観が変わらざるを得ないということだけでなく、日本人の文学的な世界観も変わらざるを得ないだろうと文学研究者として感じました。文学は想像力という人間の営みと切り離せず、今回の災厄はその想像力に大きな変化を加えないではないと考えるからです。

そこで、特に大きな被害に遭われた方々に、震災を体験したことで世界観、想像力がどのように変わったか、お尋ねし、論としてまとめたいと考えています。つきましては、私の質問に回答するという形でご協力いただけないでしょうか。

具体的な手順としては、

- 1) まず、承諾いただければ、早速、A4用紙2枚程度の質問状をメール添付（または郵送）でお送りし、それにメール等で9月11日頃までに回答していただき、
  - 2) ご回答を踏まえつつ、必要に応じて細部について確認させていただき、
  - 3) ご回答を踏まえて私なりに考察したものを9月中にお送りしますのでお目通しいただく（疑問点などありましたら修正します）、
- というような形を考えています。プライバシーの問題がありますので、論文発表時には、お名前は明かしません。

本来なら直接伺って現地の状況を（マスコミ等を通じてではなく）自分の目できちんと見ながら、直接お話を伺うべきところですが、小さい子どもを抱えていることもあってなかなか身動きが取りづらい状況です。9月に仙台・三陸地方を訪れることも考えてはおりますが、100%実現可能かはっきりせず、まずはこのような形をお願いする次第です。（もし訪問が実現した場合、ご予約が合うようでしたら直接お会いできれば幸いです。）

ご多忙のところ大変恐縮ですが、どうか是非とも前向きにご検討いただき、ご協力いただければ幸いです。

このような依頼文に快く応じてくれた4名の方々は、自らが被災者であり、非日常化した職場の激務に耐える中、私のアンケートに丁寧に回答して下さいました。この回答の言葉たちが、読者にさまざまな思考を促すことを願ってやまない。

## 2 東日本大震災で被災された方への世界観・想像力の変化についてのアンケート

### (1) アンケート質問

アンケート回答を引き受けてくれた4名にお送りした質問状を以下に掲げる。

質問者：山口俊雄（愛知県立大学日本文化学部教員）

はじめに、アンケートにお答えして下さることに改めて感謝致します。被災地域はまだまだ復興途上ですし、被災者の多くはまだ震災前の生活条件を回復できていない方も多く、その意味では、震災による被害はまだ過去のものになったとは到底言えず、このようなタイミングでいろいろとお尋ねすること

はさまざまな躊躇の思いもあります。

ただ、このような段階だからこそお聞かせいただける考え方・感じ方があると認識しております。たとえすっきりと割り切れない思いや、さまざまに矛盾した考えであっても、実感に即したものであればぜひともそのままにお聞かせくださるようお願い致します。

とはいえ、たくさんの犠牲者を出している今回の災厄ゆえ、身近な人を亡くしたりということもおそらくおありだろうと思います。私の今回のアンケートが、悲しみを再び呼び起こしてしまうということがあれば、それは率直に申し訳なく思います。そのような実感も、質問（特に【Q6】）に回答していただく際に、可能な限り言葉にさせていただけますと、資料としての意義を当然持ちますが、喪失のつらさをフラッシュバックさせるようなことは、まったく私の本意ではありませんので、どうか、ご無理はなさらないください。

それでは、以下、今回のアンケートの主題に関わる質問をさせていただきます。質問項目は次の通りです。

- ・ 震災発生時の所在地等
- ・ 自己認識と時間認識
- ・ 関係性認識
- ・ 空間認識・地理認識
- ・ 死生観
- ・ メディア認識
- ・ 行政機関（自治体や政府）についての認識
- ・ 原発事故との複合性
- ・ 文学表現

「世界観」という言葉については、日々生きてゆく中で自分にとって身近な日常的な活動範囲、およびさらにその外縁を取り囲む日常的に意識している世界についてのイメージというぐらいの意味合いでご理解ください。

また、「想像力」について直接の質問は多くありませんが、自己認識や世界認識のあり方が想像力のあり方を規定すると考えられますので、世界観に関する質問がそのまま想像力に関する質問へと繋がっているのだとご理解くださ

い。

ご回答の作り方としては、質問番号を明示していただいた上で、ご回答をお示しください。（書式については、一般的なものであれば特に細かい指定はありません。）

（例） 【Q1-1】 ○○県庁第1庁舎（7階）

ご回答の分量（文字数）については【Q2】を除き、特に指定はありません。なるべく具体的にということだけは是非ともお願いしたいのですが、分量については回答者のご判断にお任せしたいと思います。

= 質問用紙 =

### 【Q1】《震災発生時の所在地等》

震災発生時どこで何をしておられましたか？（回答者に関わる基礎データを把握するための客観的な質問です。公表時にはご希望に応じて曖昧化します。）

- ・【Q1-1】 発生時にいた場所（住所及び施設名、施設内における場所）
- ・【Q1-2】 発生時に従事していたこと
- ・【Q1-3】 震災発生後、最初にご自宅に帰宅されたのはいつですか。また、帰宅するまではどこに滞在し、どのようなことに従事されましたか。

### 【Q2】《全体的な質問》

震災前と震災後とで、あなたの世界観・生きることについてのイメージにおいて、一番大きく変わったことは何ですか。敢えて一つに絞って、直感的に簡潔に（150字以内で）述べてください。

### 【Q3】《自己認識・時間認識に関わる質問》

・【Q3-1】 朝起きたときに持つ「今日一日」についてのイメージや、それにまつわる自分の気持が変化しましたか。もし変化したということでしたら、その変化についてなるべく具体的に述べてください。

なお、一言で震災後と言っても、震災直後と9月はじめの現在との間でも変

化はあると思います。その変化についても、目立ったことがあれば併せて述べてください。

・【Q3-2】夜寝るときに持つ「明日（あるいは明日以降）」についてのイメージや、それにまつわる自分の気持が変化しましたか。もし変化したということでしたら、その変化についてなるべく具体的に述べてください。

なお、一言で震災後と言っても、震災直後と9月はじめの現在との間でも変化はあると思います。その変化についても、目立ったことがあれば併せて述べてください。

・【Q3-3】5年後の自分およびお住まいの地域のあり方について、どのようなイメージをお持ちですか。あまり具体的なイメージをお持ちではない場合は、その旨お答えください。

・【Q3-4】10年後の自分およびお住まいの地域のあり方について、どのようなイメージをお持ちですか。あまり具体的なイメージをお持ちではない場合は、その旨お答えください。

#### 【Q4】《関係性認識に関わる質問》

今回の震災で被災された方々の多くが避難所生活を強いられ、またさまざまインフラストラクチャーの破壊があり、被災地域にお住まいの方々の大半がいやおうなく協力し合い、関わり合って生活せざるを得ない状況となりました。必要に迫られて一種「共同体」が現出する事態について、人と人が助け合う状況が生れたとして評価する声もあります。

人の関係性についてどのようなイメージを持つかということはその人の世界観の重要な部分を構成すると考えられますが、そのような「共同体」の発生、濃厚な関わり合いの発生について、どのようにお感じか、実感に即して述べてください。

#### 【Q5】《空間認識・地理認識に関わる質問》

今回の震災ではたくさんの方が被害を受け犠牲となりましたが、一方で「被害の格差」ということも生じています。このことにちなみ、次の質問にお答え

ください。

・【Q5-1】お住まいの地域（市町村からせいぜい県レベルの範囲内で）にまつわる空間認識や地理認識について変化がありましたら、それについて述べてください。

・【Q5-2】被災が基本的になかったか僅少だった日本の他地域との比較・対比の中で、お住まいの地域についての認識の変化がありましたら、それについて述べてください。

#### 【Q6】《死生観に関わる質問》

前の質問【Q5】で触れた「被害の格差」とも関わりますが、同じ大震災での被害といっても助かった人・亡くなった人と明暗が生じます。「一歩間違っていたら自分の方が死んでいたかもしれない」というようなことは、必ずしも大災害に見舞われなくても多くの人々が一度ぐらいは感じることもありませんが、そのあたりの運命観・死生観に関わることで、震災前と変わったことがありましたら、述べてください。

#### 【Q7】《メディア認識に関わる質問》

・【Q7-1】今回の震災では、停電やテレビ局被災のためTVが見られなくなり、新聞も発行・配達が困難になり、また携帯電話も基地局の被災や回線容量その他の理由で繋がりにくくなり……と、平常時に当たり前に利用しているメディアが利用不可能になるということが生じました。そのような事態の中、特に必要な情報は、どのように入手し、伝え合いましたか。具体的に記述してください。（複数の事柄を挙げてくださって構いません。）

・【Q7-2】今回の事態を踏まえ、今後有用なメディアとして重視するものは何ですか。

・【Q7-3】今後、メディアがどうあるべきだと感じましたか。

#### 【Q8】《行政機関（自治体や政府）についての認識に関する質問》

今回のような甚大な災害が発生した場合、行政機関の役割は多大なものがあ

りますが、行政機関自体が被災したケースも多々見られ、また行政機関が日常業務的ではない業務を遂行するという状況に接するなどした中で、行政機関の役割や存在意義について認識の変化はありましたか。ありましたら具体的に述べてください。

**【Q9】《原発事故との複合性についての認識に関する質問》**

今回の大震災では、大震災そのものの被害の甚大さに加えて、原発の重大事故も引き起こし、特に福島県を中心に放射線被曝の問題も加わった複合災害となっており、また電力不足の心配から東北電力・東京電力管内での「電力使用制限」施行も引き起こしております。このことを踏まえ、原発事故も視野に入れての大震災被災の実感についてお聞かせください。

**【Q10】《文学表現に関する質問》**

文学（小説・詩歌ほか）といった文字による虚構的表現分野が今回の大震災を取り上げ、作品化するとすれば、今回の大災害の本質をとらえた場面として必ず含まれているべき場面としてどのような場面を含んでいるべきだと考えますか。実感に即して可能な限り具体的に述べてください。（場面は、複数挙げていただいても構いません。）

**【Q11】**最後に、上記の質問項目への回答の中に盛り込めなかったものの、大震災による世界観・想像力の変化に関して重要だと感じておられることがありましたら、自由に記述してください。

★ご協力ありがとうございました。

**（2）アンケート回答**

以下に、4名の回答者の回答を掲げる。名前は伏せ（アルファベット化）、被災時の年齢と性別、回答を山口が受け取った日付を示しておく。[ ]内の

言葉は山口による補いである。本稿にまとめるにあたってすべて回答者の一閱を経ている。

●Aさん（被災時45歳、男性） 2011年9月13日

【Q1-1】 福島県立盲学校校舎（福島市中心部）

【Q1-2】 校舎内で打ち合わせ（授業ではない）

【Q1-3】

1) 震災発生後の自宅帰宅時期について：発生翌日3月12日の午後（発生後約24時間後）に仙台市〔青葉区あけぼの町〕の自宅に帰宅。

2) 地震発生後から帰宅するまでの行動について：①地震発生後、勤務先の学校が一時避難所となり、近隣住民が体育館に避難してきた（約50名）。避難所で避難者への世話（食事や毛布等の支給）などを行う。避難者の他、自宅へ帰宅出来なくなった教職員（約20名）とともに避難所で一夜を明かす。

当日は入試の可否判定会議などがあり、生徒は午前授業。午後は生徒が下校していたため、幸い地震発生時に生徒の避難誘導を行う必要はなかった。

②翌日（3/12）、勤務先体育館の一時避難所が閉鎖（避難者は近くの大きな避難所へ移動）となったため、帰宅方法を思案。勤務先（福島市）から自宅（仙台市）までは約80キロ。公共交通機関（新幹線・在来線・高速バスなど）はすべてストップのため、朝9時頃、勤務地で使用している個人所有の自転車にて自宅を目指し、出発。当日は天候も良好、福島から仙台までの国道4号線の道路状況も問題なく、自転車で順調に走行。14時半頃、自宅へ到着（所要時間約5時間半）。

【Q2】 震災当日は一種の帰宅難民となったが、翌日に自転車での80キロ走行し自宅に帰った経験は自分の中で少なからず、肉体と精神を感じる機会となった。それは単にスポーツをしたり、日常的なトレーニングなどという体力ではなく、仰々しく言えば、もっと生命の根源的な部分としての肉体と体力を強く意識した。ここでいう肉体とは、精神と対極にある外側の鎧という二元論的な

肉体を指すのではなく、精神と表裏一体としての肉体である。

現在、私は年齢は45歳だが、今回の震災に限らず、有事（自分自身や家族を巻き込む災害や、突き詰めていけば暴動や戦争が起きたことも含めたあらゆる危険）の際に、最終的に信ずべき、あるいは頼りになるのは自分自身であると感じた。最終的な判断力は自分自身であること。つまり、ここではこの自分自身が「肉体」ということになる（一般的には45歳はもはや若い世代には属さないが、今回の震災の際に自分が「肉体」としての自分を再認識し、そして自分自身の肉体の可能性を確信したことにもなる）。

【Q3-1】 基本的な変化はない（無論、地震や災害が起きて欲しくはないという漠然とした願いはある）。質問 Q2と同様、もはや何が起きようが、生き延びる力と可能性は自分の中にあるという確信がある。その確信が変化といえば「変化」である。

【Q3-2】 Q3-1に同じ。

【Q3-3】 災害の最たる被災地ではないため、あまり強い意識はない。

【Q3-4】 Q3-3に同じ。

【Q4】 震災後、通常であれば関わることのない人々との関わりが発生したことは事実である。

近隣の住民との何気ない会話（水や食糧がどこで手に入るかなど、日常生活に直結した情報交換）。また、私自身の子どもが通う小学校が避難所になったため（また交通機関が完全ストップしたために、自宅待機を余儀なくされ）、結果的にボランティアとして避難所の手伝いに参加した。清掃や夜間の警備などをする機会を得た。その中でこれまで希薄に感じていた近隣住民との人間関係がわずかながらでも残っているということを感じた。道会う人びとと挨拶を交わし、互いの身体を気遣うことがこれまでであっただろうか？ また、小学校の夜警をした際にも、校舎の昇降口でストーブを囲みながら、本来なら会うはずのなかった人びと（各地から来たボランティアも含め）との出会いは新鮮であり、心休まるものを感じた。たわいもない話がこれほど心に残るものか。

【Q5-1】 特に変化なし。Q3-3に同じ。

【Q5-2】 1995年の阪神淡路大震災（あるいは9・11でも同じ）が遠い地域で起きた惨事であり、実感としてはあまり感じなかった（正直なところ、共鳴や共感を全くと言っていいほど感じなかった）。しかし、今回の震災では、自分自身が体験したことと、被災後の行動（自宅と被災場所が離れていたための苛立ちを感じ（Q6参照））と感情は、おそらく阪神の際の被災者の心境と同じようなものであったであろうという気がする（体験して初めて「共鳴」「共感」という感覚を意識したのは事実である）。

今回、自分自身が小説を久しぶりに書いたきっかけでもある（村上春樹が阪神震災後、「神の子どもたちはみな踊る」を書いたことはその当時、全く共感も理解も出来なかったが、今回その心情は切に感じる）。

【Q6】 私の住む地域では基本的に直接死を意識することはなかった。但し、震災直後、自宅と職場が離れていたこと、連絡が途絶えてしまったことで、自分自身ではなく、家族や近親者の生命が危ぶまれているのではないかという感覚は感じた。自分は生きているが、その朝まで顔を付き合わせていた家族がどうなっているかという不安感を強く感じた。まさに一瞬にして日常が非日常に変化したという意識。その反面、自分の周囲（勤務地）で生きている人びとや、彼らの住む地域が勤務地の近隣であり、彼らが自宅へすぐにでも帰り、身内の安否をすぐさま確認できるという差に怒りすら感じたのは事実である。（事実、震災半年を経て、ライフラインが復旧したことで基本的に生命の危機を感じることなく通常生活に戻った人たちの多くは、基本的に震災前と意識があまり変わっていないのではないかということに対する苛立ちはかなり実感している）。

【Q7-1】 自分自身や家族の危機の際に、基本的に信頼すべき情報をメディアから得るということを初めから期待していなかったので、情報が遮断されている状況で、あまり危機感を感じなかった。しかし、避難所で一夜を過ごした際にラジオから「仙台市の海岸部で数百の遺体が打ち上げられている」というコ

メントが流れ、音声情報の煽るような恐怖感をひしひしと感じた。

【Q7-2】 上記 Q7-1への回答と同様、特に期待しないので、「なし」。

【Q7-3】 震災直後のメディアの姿勢は常軌を逸している（異常）なので、（今回の震災においても本来の意味としてのメディアの中立性を失っていることを痛感した）、期待も向上性も求めない。

最悪なのは、避難所で流れてくるラジオの音楽の数々。「負けないで」「何度でも」「tomorrow」「夢をあきらめないで」などいわゆる応援ソングには正直うんざりした。そのようなメディアの態度は本当に被災した人間の気持ちを癒すのだろうか？

【Q8】 メディア同様、日々の生活を生き延びるのは個人の問題。今回の震災の直後から、精神と肉体ということを強く意識した以上は、行政ということとはほとんど意識しなかった。事実、行政の支援は個人的には必要としなかった（しかし、震災当日、避難所での業務においては行政の対応の慌ただしさと、それを期待する避難者（学校関係者も含む）のすれ違いを目の当たりにした）。

【Q9】 原発事故問題は地震そのもの以上に、歴史的にも我々が経験したことのないほど、これまでの災害の教訓をも遥かに超える大災害である。しかも、それは今現時点で答えも解決策も見いだせないという問題をはらんでいる。災害から半年以上を経ても、この原発問題は最終的な復旧（復興）の目処が立たない。

地震という自然災害では、人間はどこか諦念的にならざるを得ないが（人間は所詮、自然の一部だという認識）、原発問題の意識はその対極にある（自然を征服して得たはずの科学の力が今度は怪物となって歯向かってきて、もはやなす術もない状況。しかも、それが事故から半年、恐らくは数十年にも渡って、人間が制御できない見えない見えない化け物を封じ込めなければならないというしっぺ返し）。

片や、私たちの世代ではアポロ計画が月を人類が手にし、バイキング計画で

火星の姿をも目の当たりにしてきた。科学が万能であり、それを信じて育ってきた世代である。しかも現在、地球の外には有人の宇宙ステーションがある時代である。制御可能と制御不能の科学が同居している世界の矛盾と居心地の悪さを感じる。宇宙が制御できて、本来、人間が住むべき地上が制御できないといういらだち。しかも、この地上にこそ我々が生きているというのに。科学技術とは本当に我々を豊かにしてきたのだろうか。

私の亡き父は東北電力に勤めていて現在の女川原発の初期プロジェクトチームのメンバーでした。女川原発の設計段階で東京電力に出向し(40年ほど前で、そのため私も実は幼稚園時代は東京育ち)、毎日、東電や大学の原子力専門家を交えて会議や研究だったとのこと。そんなことを考えると、かつては広島を壊滅させた原爆の平和利用が夢のエネルギーとなるはずだった原子力発電が今や悪魔の代名詞になっていることに、原発を造ってきた人間の家族としては複雑な思いがある。

【Q10】文学や映画などの表現媒体の中で、災害や大惨事そのものを描くことには個人的には意味を感じない。テロリストに乗っ取られた航空機がビルに突入する瞬間や、原爆が街で炸裂する瞬間、津波が街を飲み込むその時そのものの表現には想像力はほとんど必要とされない。想像力で客観的に人びとに何かを訴えるという「普遍性」を考えるのであれば、起こったことに価値を見出すことには意味がないし、その災禍そのものに意味を見出すことも何の価値もない。戦争だろうが、災害だろうが、テロだろうが、起こってしまった過去を描き出すことは想像力の世界の役目ではない。起きてしまったことで何が残されたのか、その後何を生み出す必要があるのかが重要である。つまりは、生きている人間を描くことに意味がある。人間の営みに意味を見出す必要があるのではないか。極端を言えば死んだ人間を書き連ねての何も生み出さない。という意味で災害を捉えた「場面」に意味があるのではない。起こったことが何なのかは読者や見る側が判断することと思う。表現者がその場面をどう描くかは無論その表現者の能力であり、才能であるが、後世残る作品とは、起こった事実(場面)を詳細に描くことではなく、災禍にイメージされた普遍性(時間・

空間を超えても起きうるもの)を感じさせる表現の有無に尽きると思う。

【Q11】 Q10に同じ。

●Bさん（被災時36歳、男性） 2011年9月13日

【Q1-1】 仙台市役所（仙台市青葉区国分町 3 - 7 - 1） 7階都市計画課内

【Q1-2】 市議会への説明準備

【Q1-3】 帰宅時刻：平成23年 3月12日午前 6時

帰宅まで：仙台市役所都市計画課で情報収集及び建築物調査の準備

[自宅は仙台市太白区南大野田]

【Q2】 震災により、死に対するイメージが変わりました。道路の場所や建物の建っている標高が生死の境界となったほか、比較的被害の少ない市街地でもライフラインの遮断により普通の生活ができない状況が続きました。

病気になって死を身近に感じることはあるかもしれませんが、震災後しばらくの間は、余震が続いたこともあり、周辺に「死」が漂っているような、周りの人も身近に死を感じているような、そのような雰囲気でした。

改めて、死がとても身近なものであると感じています。

【Q3-1】 震災直後は昼夜を問わず余震が続き、夜に余震で目が覚めることが多くありました。寝不足の状態であっても、朝を迎えることがうれしくもあり、逆にこれからの復興の道のりが長いことを感じていました。たとえつらくても朝になったらやるべきことをやらなくてはいけない、という使命感のようなものを感じながら、朝を過ごしていました。

9月の時点では余震回数も減り、我が家は地震の被害がほとんど無かったことから、震災前とほぼ変わらない状態に戻りました。朝起きたときに感じていた「今日やるべきこと」への使命感についても、かなり弱くなったと感じています。

【Q3-2】震災直後は、死が身近にあると感じていたことから、余震があったら自分に明日は無いかもしれないという不安を持ちながら眠りについていました。普通の生活ができない状況で、情報も少なかったことから、今日と明日の区別がなく、ずっと震災が続いているような気分でした。

9月の時点では、震災復興に直接的に関与しない職場に異動となったことから、被害の大きさを受け止めながら仕事にあたることが少なくなったことや、ほぼ震災前の普通の生活に戻ったことから、不安感が弱まった感じがします。これにより、明日は普通にやってくるものと感じるようになりました。また、今日と明日の境界にはっきりと線が引けるようになったと思います。

【Q3-3】 家族や親戚等を失って生き残った人、住まいや故郷を失った人など、自分の世界の一部だったものを失った人と、それらが幸運にも失われなかった人との間で格差が生まれると思います。

5年では何もまだ進んでいないと思います。人々が住む場所もまだ決まらず、土地の再生もコミュニティの再生も始まったばかりの状態だと思います。

自分自身の5年後のイメージはまだ持てません。

【Q3-4】理想を言えば、新しいまち、新しいコミュニティが形成され、地域に人が集まってくるような場所になってほしいと思います。そのために現在、たくさんの人たちが動いて、努力してくれていると思います。10年あれば、この震災の被害もきっと良い方向に進み始めると思います。

しかし、私自身が多少なりとも復興計画に関する仕事をしていることから、10年間で理想的なまちづくりが進むためには、相当な困難があると思います。

たとえば、阪神大震災のときは、被災した土地は再開発等により、新たな建築をすることができました。しかし、今回津波で大きな被害が出た場所は、建築を禁止する可能性があります。

人々が暮らしていた土地を全く別の土地に変えなくてははいけません。そのための労力は相当だと思っています。

【Q4】地震発生後に情報も無く、ライフラインも寸断された状態で、避難所の皆が協力し、一種の共同体が生まれました。また、町内会やマンションの住

民が食料を分け合い生活したという話も聞いています。このような状況は、普段の生活からは想像できない良好な状況でした。

さらに、ボランティアが被災者を支援してくれたことで、共同体の運営もうまく機能できたと思います。個人的には今回の「新しいつながり」は大事だと思います。

しかし、このような一時的な共同体の目的は、安全な場所で生活を維持することであり、避難所が解散された後も共同体としての良好な関係が続いている事例は稀のようです。また、はじめから支援を断り、避難所にも行かず、支援物資を受けない人も見受けられました。さらに、避難所で支援を受けることに慣れてしまい、なかなか自宅に帰らない人も若干名発生しました。

今回の災害では、周辺状況に応じて変化できる人、変化できない人があるということを感じました。

**【Q5-1】** 震災後は、沿岸部に住みたいという話は極端に少なくなりました。そのほか、丘陵地を造成して作られた団地についても相当数の被害があり、古い時期に作られた団地へのイメージも悪くなりました。

仙台市の中心市街地は江戸時代からの城下町であり、地盤も安定し、地震の被害も少なく、津波被害も無かったことから、昔からの街に対する評価が高まりました。

**【Q5-2】** 東北全体のイメージが非常に悪くなったと感じます。日本の他地域からのさまざまな支援を頂きましたが、一部の方からは精神的な影響により東北への忌避の気配も感じました。

そのような気配を感じ取ってしまうほど、私たちの感覚も変わってしまったのだと思います。

**【Q6】** 個人的な見解ですが、不幸な事態は運が良い・悪いではなく、自分自身が危険をいかに予測し、いかに行動するかによって、一定程度は回避できるものだと思っていました。

しかし、今回の震災は我々の予測を簡単に飛び越え、大きな被害をもたらした

ました。

震災前は自分が安全な環境の中に暮らしていたこと、そして震災後は人間の力では変えられないような厳しい環境の中で偶然生かされていることを感じました。

**【Q7-1】** 停電中でテレビが見られず、携帯電話も繋がっていないときは、ラジオを聞いて情報を入手していました。逆に、情報発信についてはツイッターなどの SNS を登録していたにもかかわらず、その情報伝達手段を頭に浮かべることすらできない状況で、一切の発信をしませんでした。

仕事の終わる時間も不定期で、必要な情報は新聞を買って把握していました。

**【Q7-2】** 長時間の停電で、情報を発信すること、情報を受け取ることが非常に困難でした。

被災地からの情報発信には SNS も有効な手段だと思いますが、利用できる人が限定されます。

事例としては、地震直後の津波が迫っていた状況で、ラジオも聞けず、テレビも見られず、結果として津波の犠牲になった人もいます。市の職員で津波の警戒をするためにスピーカー付の車で広報に行き、津波の犠牲になられた人もいます。

災害からの経過時間に応じたメディア、情報を発信、受信する人に応じたメディアの再検討が必要と感じます。

**【Q7-3】** さまざまな事態を想定し、必要な情報を複数の手段により発信・受信できるようなメディアのあり方が必要だと思います。

**【Q8】** 今回の震災では、ボランティアによる支援が被災者を支えたと感じます。これまでの行政機関の想定していた災害対応（物資や設備の整備を主とした対応）では行き届かないところが多数見受けられ、ボランティアが人的・物質的にも行政機関の機能を補完したと感じました。

今後は、非常時に行政機能の一部をボランティアや NPO が代替できるような制度の構築が必要だと思います。

【Q9】 今回のように災害に伴う原発事故による放射線の被害は、日本国内のどこでも起こりえると考えます。地震・津波・原発という災害の連鎖が被害を大きくするとともに、復旧・復興のスピードを遅らせています。

このような災害が二度と起きないように、被災地は原因の分析とすばらしい復興を、被災地以外の地域は更なる防災の取組みを行うべきと考えます。

【Q10】 今の状況では、どのような場面でも被災者の心を刺激するため、表現すべきでは無いと考えます。(しかし、今回の震災を無視した作品は、それ自体が虚構になるかもしれません。)

【Q11】 私のように、結果的に震災の被害が少なかった者は、世界観や想像力の変化は少ないと思います。実際に津波や放射線の被害を受け、又は目撃した人の価値観は大きく変化したと思います。

身近な人や家を失い普通に笑うことができなくなった人、将来への不安からうつ病になる人など、外面的な部分で変化が現れた人も見受けられます。

今は、住まいや職業など、生活に直接的な部分での復興が必要だと思いますが、やがては文学や音楽、絵画などによる「心の復興」が必要になると思います。

## ●Cさん（被災時35歳、女性） 2011年9月26日

【Q1-1】 宮城県立某学校（気仙沼市）の校内

【Q1-2】 生徒がスクールバスで下校した直後、職員室へ戻るために廊下を移動していた。

【Q1-3】 自宅（気仙沼市）に帰宅したのは翌日の昼ごろ。

地震後は、スクールバスがすぐに学校に戻ってきたので、生徒の無事を確認し、徒歩で帰宅した生徒を探しに市街地へ行った。大津波警報が出ていたので、途中で引き返し、その日は学校で生徒たちと一緒に過ごした。翌日、再度、消

息のわからない生徒を探しに生徒の自宅へ家庭訪問を行った。午前中は学校へ生徒を迎えに来た家族への引渡しなどを行い、昼ごろ自宅へ戻った。

【Q2】何事に関しても、やりたいことはやっておこうと思った。行きたいと思っていたところには行っておこう、とか、会いたい人には会っておこう、とか。いつ、何がおきるかわからないし、後悔はしたくないと思った。

【Q3-1】震災後は毎日不安だった。大きい余震もあり、毎日、地震がきたらどうしよう……と思っていた。今はだいぶ落ち着いて、震災以前と変わらないように思う。

【Q3-2】夜は今でも地震がきたらどうしよう……とと思っている。半年たった今でも、夜でもすぐに逃げれるように準備している。

【Q3-3】【Q3-4】5年後、10年後、復興していて欲しい、とは思う。町並みが戻ったり、人が戻ってきたりなど。でも、実際に被害にあったところを見ると、水産業の復興などは難しいのかもしれない。

【Q4】井戸を借りたり、物資を分け合ったり、たくさんの人たちに助けてもらってありがたかった。市内にいても、知り合い程度で強く関わっていなかった人が自分を心配してくれているのは、ありがたいと思った。

でも、一人暮らしの人は大変だったと思う。実家があったから、そこに身を寄せたが、もし別の地域にいたら、頼る人もいなかったし、避難所でも、物資や水などの入手もほんとに苦しい思いをしたんじゃないかと思う。家族を作る人が増えたといっているのもわかる気がする。

【Q5-1】（地盤沈下もあると思うが）海がすごく近く、広くなった気がする。また、列車もこなくなり [不通が続く気仙沼線などのこと]、道路もしばらく使えず、仙台もすごく遠く感じた。外出したときに大きい地震が来たら、と思うと出かけられなくなった。特に映画館など、閉鎖された場所に行くのが怖くなった。

【Q5-2】これは仕方のないことなのかもしれないが、被害が少なかった地域の人はやっぱりテレビの中の話なんだろうな、と思う。[同じ県内でも]内陸の人との意識にギャップはあるのだろうと感じる。

また、私は個人的にだが、郷土愛というか地元への愛情を感じる人が多くなってきたように思う。買うなら地元のもの（気仙沼のもの）を買おう、とか、「ホヤぼーや」[気仙沼市の観光キャラクター]のTシャツとか、以前なら買わなかったな、と思うが、自分も含めて着ている人をよく見かけるようになった。

【Q6】今回、私自身は本当に大きな被害がなくてラッキーだったと思うし、だからこそ、やりたいことをちゃんとやっておこう、と思った。今までは、後からでもいいかな、と思っていたこともあったけど、先延ばしにせずに、やりたいことをしようと思っている。

【Q7-1】ラジオと、直接話した人からしか情報が得られなかった。後は、確かめるためには自分で行って直接確認するしかなかった。

【Q7-2】非常時にはラジオが有効だと思うが、平常時でTVがあれば、ラジオは聞かないなと思う。

【Q7-3】災害への備えを十分にしてもらって、少しでも情報を提供してもらえたらと思う。

【Q8】災害時だからこそ、行政にはがんばって欲しいと思ったし、すごく助けてもらった自衛隊には感謝している。

【Q9】原発も今すぐなくすことはできないし、代替エネルギーができるまでは、仕方がないのかなと思う。今の電気のある生活をやめることは難しいと思う。

【Q10】自然の力の大きさ。人間の力なんて無力だということ。どの場面が、ということではないが、当たり前のことを実感した。

【Q11】 特にありません。

●Dさん（24歳、女性） 2011年9月16日

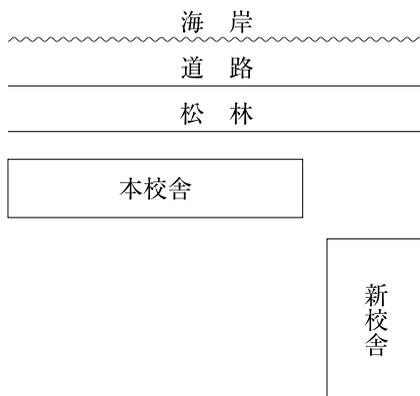
【Q1-1】 石巻市立E中学校の一階廊下

【Q1-2】 午前中は本校の卒業式。午後から第二部（不登校の生徒のための卒業式）が行われる予定だったため、会場となる体育館に向かおうとしていた矢先に……。

【Q1-3】 はっきり覚えてはいませんが1週間以上経ってからだったと思います。それまでは、避難所となったE中学校で勤務。避難所の運営など。

[Dさんの勤務先のE中学校の立地条件や被災時の状況について、山口が追加説明を求めたところ、Dさんは以下のような詳細な説明を寄せてくれた。]

E中は、海岸から200メートルほどのところにあり、海岸と平行に建てられた本校舎には職員室や教室がありました。（下図参照）



避難所に指定されていたのは特別教室がある新校舎で、当日私たちが逃げ、今も避難所となっているのは、この新校舎です。波は新校舎の2階まできて、

私たちは3階に逃げてようやく助かりました。

被災後数日は3階で生活していましたが、徐々に場所が必要となり、職員や避難民の方の力を借りて2階や1階を掃除し、使えるようにしました。3階は主に避難民の方々の住居、市の方が運営に携わるようになってからは、その方々が寝泊まりする本部となりました。一時期他県から来た医療チームが仮設の診療所のようなものを開いていたことも。

2階は物資置き場、職員室（打ち合わせ、市役所の人に来るまでは避難所の運営業務、生徒の安否確認のとりまとめなどを行っていました。職員30人ほどがここに寝泊まりもしていました。男女関係なく段ボールや座布団を敷いて寝たり、衣食住を共にしました）、理科室を調理などをするための部屋に改造した部屋などがありました。

四月から夏休み明けの8月いっぱいまでは、E中学校は三学年が別々に別れ、それぞれ別の学校に間借りして授業を行っていました。（1年生は隣の学区のF中学校、2年生はE中学校から3キロほど内陸に入ったところにあるG中学校、3年生は隣の学区のH小学校）9月からは、I小学校の校庭に仮設校舎が建ち、やっと三学年全員が一緒に授業を受けられる状態になりました。ちなみにI小学校とG中学校は隣接しており、G中学校の校庭に、E中学校と同じ学区にあり同じく被災したJ小学校の仮設校舎が建ちました。

## 【Q2】

世界観……これだけ地震の多い宮城県で生まれ育ち、沿岸部に暮らしていたのにも関わらず、まさか生きて津波をこの目で見ることになるとは思ってもいませんでした。自分がテレビなどのメディアを通して漠然と見ていた“被災者”の側に立つとは。まさか、が自分にも起こりうるということ。昨日まで当たり前だった日常が一日にして覆ることがあるのだということ。

生きること……何が生死を分かつか分からない。これだけ科学が進歩したのにも関わらず、病気や寿命、本人の意志、生前の行いなどとは全く関係のないところで自然という大きな力に命が奪われることがあるということ。自然の猛威は、ある意味どんな人にも平等に、かつ不平等に襲いかかるということ。

【Q3-1】震災直後は寝て起きる度にあれは夢だったのではないかと、目が覚めれば今まで日々・風景が目の前に広がっているのではないかと考えていました。半年経った今では、「今日中にこれをしなくては……」「今日は〇〇がある。嫌だなあ……」と、もっぱら仕事について。震災後、[東松島市に]引っ越したため通勤距離も長くなり、徐々に活力を取り戻していく街の様子を眺めながら30分ほどかけて車で通勤しています。

【Q3-2】少ない食料と100人以上の避難民。一向に訪れる気配がない助け、物資。震災直後は、明日はどう生き伸びよう……ということばかり考えていました。毎朝の職員の打ち合わせで校長が「〇日目、今日も生き伸びました。」と言っていたのを覚えています。

今は【Q3-1】で答えた通り、仕事のことばかり。早く週末が来ないかな……など（笑）。

【Q3-3】今年度いっぱいまで初任校である現在の勤務校を出ることになるので、それに伴い、もしかしたら他管区へ引っ越しているのではないかと。住んでいる東松島市は、中心部の被害はそれほどでもないで、現時点でも、ほぼ震災前と変わらない状態に戻ってきていると思います。そのため、数年後にはほぼ復興を遂げていると思います。しかし、勤務地があり、私自身も震災前に住んでいた石巻市は、漁業の街。大きくダメージを受けた漁業がどこまで建て直されるか……。観光業でも大きくダメージを受けたため、市の経済が不安。

【Q3-4】自分自身としては、結婚して家庭を築いている、というのが希望。出来れば今住んでいる石巻管内で。ただし、自分自身よりも今一緒に住んでいる家族（母、祖母）の方が不安。二人とも気仙沼に戻りたいという意志はあるが、石巻よりはるかに被害が大きい気仙沼は人が住める場所も限られており、住むところの確保も難しい。かといって二人の年齢からして新しい場所で生活を始めるだけの気力もなく、母は失業したため経済力もないため、どこに住むかも定まらない状態。

【Q4】避難所での生活は2週間以上に及んだと思いますが、私は本当に恵ま

れていたと思います。職員も含め、そこで生活をともにした避難民の方々は皆本当に良い方ばかりでした。私一人だったならば、あれだけの大きな災害に直面して正気をたもっていた自信はありません。夜明かりがなく真っ暗な中、誰かがトイレに行く度に持っていたライトで照らしてくれたおじいさん。女性陣で炊き出しをしたり、トイレの水をプールからバケツリレーで運ぶため、みんなで廊下に列を作ったり……。震災前まで赤の他人同士だったはずの顔ぶれが、徐々にひとつの共同体になっていく様子がうかがえました。たくさんの人々に支えられて毎日生きていることに感謝して笑顔で乗り切ることができました。

【Q5-1】 それまで、海からさほど近いという意識が無かった場所の多くが今回の震災で津波の被害を受けたことが驚きでした。実家のある気仙沼については市街地の大部分が当分人が住めない場所になってしまいました（実家は気仙沼市内の脇、南気仙沼駅から徒歩5分ほどのところでした。近くには中央公民館があり、当日母と祖母はそこに避難してなんとか助かったようです）。生まれ育った場所が、その風景を根こそぎ奪い去られたことがいまだに信じられません。今でも帰ればそこに慣れ親しんだ風景が広がっていると信じていたい気持ちがあります。そのため、正直あまり気仙沼には帰りたくないと思いません。そんなこと考える自分はずるいし、弱いのもかもしれないけれど、変わり果てた故郷を見るのは耐え難いです。

【Q5-2】 同じ石巻市内でも、勤務校のあるEは被害が酷い方ではあったが、震災後はじめて蛇田（内陸部になりイオンができ、三陸道のインターも近く、市内で最も栄えている）に行った際、車で30分程度の距離なのにこれほどまでに違うものかと愕然としました。津波が来たか来ないでこれほどまでに被害の差があるのかと。さらに震災後初めて仙台にいった時も、いまだ戦後の様な風景・生活のただ中にあるEの人たちのことを思うと泣きたくなりました。

【Q6】 私自身人生で初めて身近に「死」を感じたのは、高校生の時に父が長年患ったガンで亡くなった時です。今でもそれが一番衝撃が大きかった「死」の体験だったと思っています。

今回の震災ではあまりにも多過ぎる命が犠牲になりました。身近な人々のあまりに唐突過ぎる「死」だったため、まだどこかで生きていてくれるのではないかと思ってしまう。

震災により、去年担当していた学年の生徒はきちんとしたお別れも出来ないまま50名近く転校していきました。その生徒たちが今もどこかで元気に生活してくれているように。「死」ではないものの、あまりに唐突過ぎる別れが多すぎました。

亡くなった人たちに関しては「なぜあの人が……」と。そして「なぜ私は生き伸びたのだろう」、「私とあの人と、生死を分けたのはいったい何だったのだろう」と。生き残った自分自身に対して自責の念に駆られるということはありません。ただ、純粹に何が生死を分かつか分からないのだなど。「運命」という言葉はあまり好きではありませんが、人の「運命」「さだめ」についても考えずにはられません。

【Q7-1】ラジオ。震災当日の夜は、避難民の方々と校舎中からかき集めた暗幕やカーテンにくるまって、まっくらな中間こえてくるラジオの声にひたすら耳を傾けていました。特にラジオ石巻というローカルなラジオ局の放送が、身近な人たちの安否を確認するために有効でした。「○○町の○○です。○○さん、無事ですか。私たち家族は今○○にいます。」などという情報がひたすら流れていました。校舎に残っていた生徒が技術の授業で作った手で充電のできるラジオが大活躍でした。

【Q7-2】ラジオ。

【Q7-3】当然のことですが、事実を迅速に、ありのままに、正確に伝えること。そこに余計な何者かの「主観」は必要ないのではないかと。

【Q8】[回答なし]

【Q9】原発事故に関しては、自分自身の被爆する可能性があることはもちろん不安ですが、何よりまだこの世に生を受けてすらいない、将来の我が子のこ

とを考えると……。子どもたちに自分の震災の体験を、自分なりの言葉で語り継いでいきたいと思っていますが、我が子が生まれる前から震災の被害（放射能汚染）を受ける可能性があることを考えるとやるせない思いです。

### 【Q10】

- ・津波
- ・津波が引いたあとの風景（とにがく凄まじかったです）
- ・灯りのない夜（真っ暗な中、寒さに凍え身を寄せ合い、ラジオに耳を傾けた3・11当日の夜。また日の入りとともに活動が制限され、日の出と共に起きる……という原始的な生活をしていた震災後の日々。）
- ・避難所での共同生活
- ・浪が引いたあとのヘドロの中を歩き回ったこと
- ・身近な人の死
- ・知り合いを探し回る人（瓦礫やヘドロで足下も覚束ない中、歩くしか交通の術がなく、避難所や知人宅、はては遺体安置所まで探し歩く人々がたくさんいました。）
- ・救助・支援にきた自衛隊の目線\*
- ・どさくさに紛れての火事場泥棒、人間の欲、醜さ。（コンビニのレジやATMを荒らしたり……）
- ・3・11当日の夜、なんの情報伝達手段もないなかで大切な人の安否を気遣う人

\* [もう少し詳しく説明が欲しいという山口の求めに応じてDさんは以下のように補足してくれた。]

今はだいぶ文学から遠ざかったところにいますが、以前は私も創作のまねごとをしたこともありました。なので、自分ならこの震災をどう作品として仕上げるか……。自分の実体験の中でどれを切り取って加工して仕上げるだろうか……。と考えてもみました。その中でただ中からの目線だけではなく“外の視点”から描くのも面白いかなと。あと、震災後数ヶ月にわたり自衛隊の方々は本当

にいろんな面で尽力して下さっていました。通勤途中など、自衛隊の乗る大きな車（いろんな種類がありました。詳しくない上に、語彙も乏しいので車と表現しますが……）を横目で見てみると、中には護送車のように中にたくさん自衛隊の人たちが乗り込んでいるものも。その自衛隊の人たちが何気ない会話をして笑っている姿を見て、当たり前のことなのですが、この人たちも“普通の人”であり、帰れば私たちと同じような日常があるんだなと思いました。自衛隊を見る側だった私たち（被災者）からすれば自衛隊の人こそ“非日常・非現実”でしたが、あちらからしたら私たちこそ“非日常・非現実”なんですよ。

### 3 おわりに

以上、4名の言葉を紹介した。

莫大な数の3・11の被災者の中の4名に過ぎないが、世界観・想像力という観点からこの4名に発してもらった言葉ひとつひとつから、被災地から遠く離れたところに生きる者もたくさんのかんことを受け止め、学ぶことができるはずだ。4名の、被災状況や感じ方・考え方の違いと共通性と、いずれからもたくさんのかんことを受け止め、学ぶことができるはずだ。

私がそれらの言葉を一般化したり方向付けしたりすることは控えておきたい。「はじめに」にも記したように、私が下手に加工するまでもなくそれ自体で有意義な資料となっていると考えるからである。私の一般化、方向付けが回答の言葉がせっかく持っている広がり、奥行き、深みを奪って貧しいものにしてしまうことを何よりも恐れる。その意味で、本稿は論文ではなく資料紹介とすべきものであろうが、このような資料を紹介できることに私は満足を覚える。

ただ、一つだけ記しておきたいのは、回答してくれた4名のうち、3名が学校教員、1名が地方公務員（行政職）と、いずれも次世代の育成や市民への公的サービスという職務を通じて、被災地の社会・共同体と直接的に関わっていることである。そのためだと思われるが、回答の多くに個人のサヴァイヴァル以上の広がりを感じられる。

「はじめに」に掲げた依頼文を発送した8月中旬の時点ではまだ確定していなかった、私自らも回答者たちの住む地域に足を運ぶということは、結局、実行できた。

妻と3歳の娘とともに、一ノ関から大船渡線経由で気仙沼に行きCさんの実家に1泊、翌日、浸水した中心部や火災のひどかった鹿折方面、駅前に大きな船が残っている鹿折唐桑駅などへ親戚の車で案内してもらったあと、レンタカーで、主に国道45号線沿いに石巻方面へ南下、石巻でDさんにお会いした後、仙台松島道路経由で仙台に向い、翌日、Aさん、Bさんにお会した。

美しい海の色とは裏腹にがれきだらけの標高の低い入江の集落と、ほとんど被害の見られない標高の高いところと、南三陸の国道45号線の上り坂・下り坂の繰り返しを走りながら、6ヶ月たってまだまだこの状態であることに復興の道のりの遼遠さを思い、そんな中で暮らすたくさんの方々の被災者たちの苦難に改めて思いをはせずにはいられなかった。

憤りと悲しみはなかなか癒えないが、アンケートの回答に接し、駆け足ながらも被災地に足を運んだことで、その憤りと悲しみに具体性・身体性が加わり、少しだけ付き合いやすくなったようにも感じられる。それにしても、やるべきことがまだまだたくさんあり過ぎる。